

信念対立解明アプローチを基礎とした 異文化理解力涵養プログラムのためのシステム開発

System Development for Cultivate Understanding Attitudes on Cultural Differences

辻川 達郎^{*1}, 小川 泰助^{*2}, 瀬田 和久^{*3}, 池田 満^{*2}, 松田 憲幸^{*1}, 三浦 浩一^{*1}, 瀧 寛和^{*1}
Tatsuro TSUJIKAWA^{*1}, Taisuke OGAWA^{*2}, Kazuhisa SETA^{*3}, Mitsuru IKEDA^{*2}, Noriyuki
MATSUDA^{*1}, Hirokazu MIURA^{*1} and Hirokazu TAKI^{*1}

^{*1} 和歌山大学システム工学部

^{*1}Faculty of Systems Engineering, Wakayama University

^{*2} 北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科

^{*2}School of Knowledge Science, Japan Advanced Institute of Science and Technology

^{*3} 大阪府立大学大学院理学系研究科

^{*3}Graduate School of Science, Osaka Prefecture University

Email: s151028@center.wakayama-u.ac.jp

あらまし: 自国と他国との文化的背景・価値観の相違から生じる意見の食い違いや衝突を解消するワークショップを京極の信念対立解明アプローチに沿って設計する。信念対立とは、疑う余地のない信念が矛盾する事態に直面した時に引き起こされる確執であり、ディスカッションを通じて相手の意見と自らの意見を比較し、振り返ることで意見を涵養させることができると考えた。そのワークショップを支援する教育システムを開発する。

キーワード: 信念対立解明アプローチ, 異文化理解力涵養ワークショップ, 教育システム

1. はじめに

筆者らは平成 22 年度より効果的な訓練が難しいとされるメタ認知スキル育成を目的に、京極の「信念対立解明アプローチ」をベースに、思考外化ツールを用いた共創教育を専門知識を有しない大学初年次生および高度専門職である医療従事者を対象に実施してきた^{(1),(2)}。この結果、専門知識の有無によらず、適切な課題設定のもとで自己内対話プロセスを顕在化させ熟考を促すことにより、メタ認知スキルを議論を通じて構成できることが分かってきた。この方法を異文化を理解し、国際交流力の熟達支援にも適応できないかと考えた。

京極は信念対立を『疑いの余地なき信念が矛盾する事態に直面すると引き起こされる確執』とし、信念を言葉に解明するアプローチを提案している⁽³⁾。

本稿では、自らの思考を整理する自己内対話と、実際に他者と議論する他者対話によるワークショップをより円滑に進める教育システムについて述べ、異文化理解力涵養するワークショップ（以下 WS と呼ぶ）の詳細については瀬田⁽⁴⁾に譲る。

2. 教育システムの設計

WS は一つの議論を 4 人程度のメンバーで構成する。WS におけるステークホルダには主に、ケースライター(CW)とディスカッションメンバ(DM)がいる。WS において CW と DM の立場は交代で担当することにしている。図 1 にユースケースを示す。以下、CW による教育システムの手順、および、設計意図について述べる。

① 自己内対話 1: CW は他国の人との間に起きた意見の食い違いをシーン（「場面」と意見の「衝突」）に記入する。つづけて自ら(You)の「意見」、その理由や根拠となる「信念」、さらにその理由・根拠となる「背景」を記入する。さらに、他者(Other)の立場で同様に「意見」、「信念」、「背景」を記入する。ここで完成した文章を特にケースと呼ぶ。

次に、これまでの思考は十分か、これ以上の思考がありえないかを考えさせるために、質問を記入させる。記入は、まず、あらかじめシステムに準備された汎化質問から一つを選ばせ、質問と答えを記入させる。汎化質問は、「意見」、「信念」、「背景」ごとに準備し、「自ら(You)」と「他者(Other)」との間、および①自己内対話 1 と②議論との間で共通である。

議論に先立って自己の立場や考えの前提を明示的に知ること、異なる判断指針に立つ他者を想定することで相手の価値観や前提の違いを理解する異文化理解への気づきが生まれると意図している。

② 議論: ケースを題材にして議論を行う。ケースの一つを選び、メンバー全員で①と同様の方法で質問を作成する。汎化質問の一つを選びそれに対する回答を作成する。①の自己内対話においてあらかじめ質問の答えを考えてから議論に望むことで自分は、質問のバリエーションが十分でない、優先順位が適切につけられていないことに気づくことを意図している。

③ 自己内対話 2: 自己内対話 1 で作成したケースおよび質問と、議論で作成された質問を参照させて、

もう一度自己内対話を行い、ケースを作り直す。

- ④ リフレクション: ③のケースの書き直しについて、議論のどの質問がきっかけとなったかを考えさせる。自国の文化、道徳観、倫理観に沿った相手の理解では本当の意味での異文化間コミュニケーションが成立しないこと、自分の思考の前提、判断の指針、異なる背景/前提に立つ対立する考えの様相に目を向けて明示的に思考することの重要性に気づかせることを意図している。

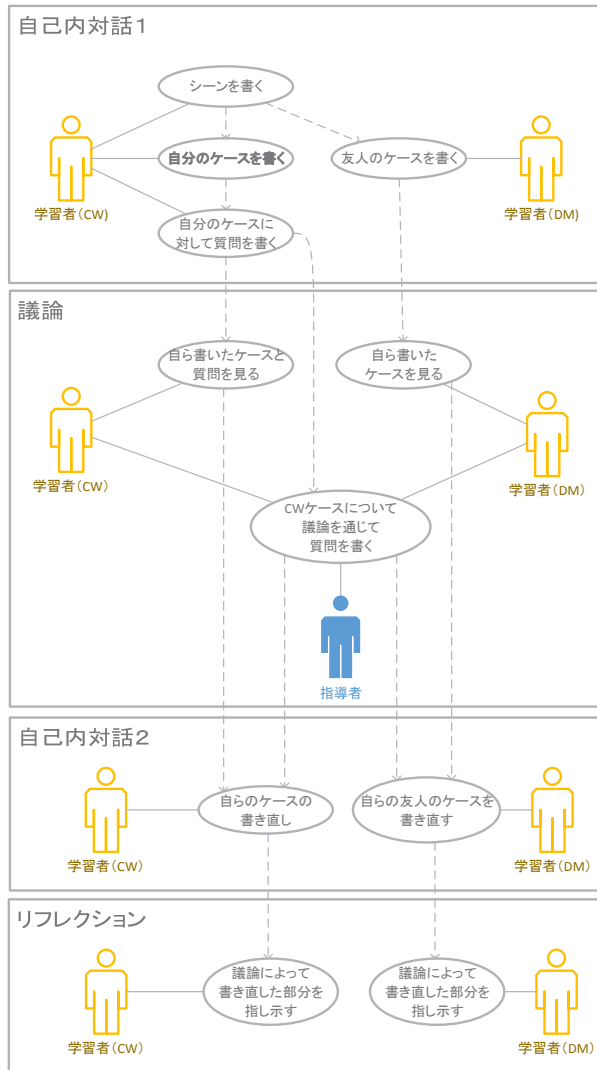


図 1 教育システムのユースケース図

- Generic Question for Opinion**
- What is the problem?
 - What is going on?
 - What makes conflict between them?
 - What is the point they argue?
 - ○○○ is for what?
 - What is his/her hope?
 - What is the purpose to ~?
 - What is going on actually?

図 2 「意見」の汎化質問

3. 教育システムの開発

図 3 に議論を行う際のシステム画面を示す。この画面は指導者によってプロジェクターなどに投影されることによりメンバー全員が共有している。このとき CW はノート PC などを通して自らが①で作成したケースおよび質問を個人的に参照する。DM も、CW のシーンから自ら作成した DM のケースをノート PC などを用いて参照する。

共有画面は、左端の CW のケース、中央に議論で作成された質問、右端が質問入力フォームの 3 つで構成される。議論を通して、指導者は、まず、プルダウンメニューから質問を作成するフィールドを選ぶ。フィールドには、自分の意見、信念、背景、他者の意見、信念、背景の 6 つがある。次にリストボックスから汎化質問を選び、質問および答えをそれぞれのフォームに自由記述する。作成した質問は画面中央の表に順次追加される。

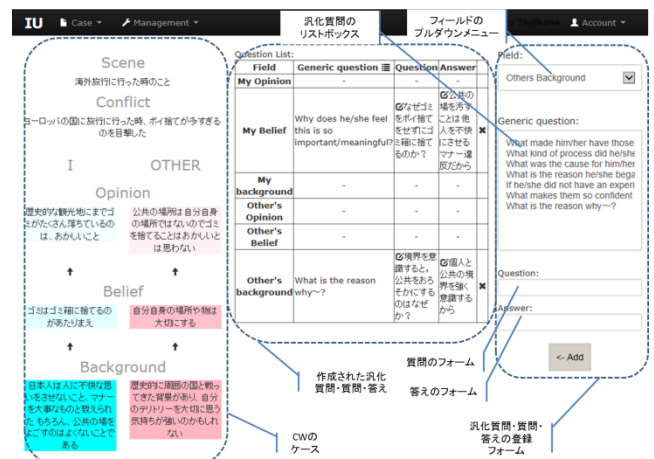


図 3 議論を行う際のシステム画面

4. まとめ

異文化理解力を涵養するワークショップのための教育システムの設計および開発について述べた。一旦、自己内対話で完成したはずの記述を、他者との議論を経て、システムがさらなる記述を促すことを意図して設計した。今後、さらに実際のワークショップへ導入し分析、評価する予定である。

参考文献

- (1) 瀬田, 崔, 池田, 松田, 岡本: “思考外化と知識共創によるメタ認知スキル育成プログラム —大学初年次生を対象として—”, 教育システム情報学会誌, Vol. 30, No. 1, pp. 77-91 (2013)
- (2) 崔, 田中, 陳, 松田, 池田: “医療サービス改善のための思考育成プログラム”, 電子情報通信学会, 信学技報, vol. 113, no. 377, ET2013-77, p55-60 (2013)
- (3) 京極真: “チーム医療・他職種連携の可能性をひらく信念対立解明アプローチ入門”, 中央法規 (2012)
- (4) 瀬田ほか: 信念対立解明アプローチを基礎とした異文化理解力涵養プログラムのためのシステム開発, 第 39 回教育システム情報学会全国大会予稿集, (2014, to appear)